長洲町立長洲小学校　校長便り　No.８７

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和５年５月１日(月)

今日明日を乗り越えれば５連休ですね。休みに入る前は楽しみで仕方ありません。

私がこの時期に最も心配するのは、事故やケガです。イベント等に参加すると楽しさが勝ってしまい、危険回避のアンテナ感度が鈍ってしまうことがあるからです。

私はＧＷに何か大きな行事があるという訳ではないのですが、それでも何かワクワクするような感覚は抑えきれません。

ＧＷ中、いつもよりも意識して危険(危機)回避に取り組むようにしてほしいものです。

【独り言】加点法（ポジティブ）思考

我々大人は、子供達に対して「やればできる」「継続は力なり」と、金言として言い聞かせることがある。しかし、上辺だけの言葉では子供達の心には響かない。成功体験や努力が実を結んだという体験など、経験や信念に基づいた言葉でしか、子供達を変容させられない。

今年の３月４日、４２・１９５㎞の強歩会が実施された。一般的に考えれば多くの人は「長い」と考えるだろう。ここからの思考が重要である。もし、「長い」イコール「無理」となれば、実施そのものが無しになるであろう。ネガティブな思考は「出る杭」を打つのである。反対に「長い」イコール「面白そう」とか「ワクワク」とか「挑戦!!」とか「どうしたら完歩できるか」という思考になるなら、その時点で参加希望者は全員完歩したも同然である。そもそも、ネガティブな思考には「きついからいや」とか「面倒だからいや」という考え方が根底にあり、どうすれば実施、完歩できるかという発想にはならない。楽しもうという発想も無いので、嫌々ながら参加することになり、効果も中々上がらないのも事実である。

強歩会は経験的に考えて、教育効果も費用対効果も非常に高く、安全対策をしっかり講ずることができ、やる気さえあればできる行事である。まさに「やればできる」なのだ。「継続は力なり」も実感できる。大人の歩行では、約７万歩で４３㎞を踏破できるのだ。今年の強歩会では１名の１年生がＡコース４３㎞を踏破している。短い一歩でもそれを継続することで確実にゴールすることができるのだ。ある１年生が「強歩会に挑戦したい。」と言ったとしよう。保護者が「１年生だからあなたには無理よ。」と決めてしまったらどうだ。「大人が子供の可能性の芽を摘んでいる。」と言えるのではなかろうか。この考え方は、他の行事や活動にも応用できる。辛いことや苦しい事でも、先ずは取り組むことが大切であり、楽しく取り組もうと、発想を転換することで、大きな効果や成果を生むのである。

令和元年度末からいわゆるコロナ禍での学校運営を余儀なくされ、多くの行事が中止、あるいは内容が縮小され忸怩たる思いだった。中止された行事の中には子供達が心待ちしていた行事も含まれる。多くの行事にはリスクが伴う。しかし、リスクにしか目がいかなければ、行事の成功はおぼつかない。本校職員には校長として「どうすれば実施できるか?」という視点で行事を見直すように指示し、それに応え対策を講じつつ、多くの行事にチャレンジしている。教育効果が高く独自性適時性の高い行事が優先されたが、それでも子供達や保護者の方々から感謝の言葉を頂いた。有難いものだ。令和５年度も本当に必要なものを見極めて学校運営に邁進したい。

シリーズ「自分を語る」＃87

前回は、タイの研修員のロンさんでしたね。今日はそのお隣の国、カンボジア」からの研修員受け入れです。カンボジアの研修員は「学校教育」研修の希望でした。さぁ、面接です。といっても言葉は当然通じません。今回も先方の研修員派遣窓口の日本人と面接でした。窓口は「ＪＨＰ学校を作る会フノンペン事務所」です。学校を作る会と聞いて、おやっ？と思う方もいるかもしれませんね。少しカンボジアという国についてお話ししましょう。

カンボジアには悲惨な歴史の側面があり、それに関係して学校を作らなければならない事情がありました。アメリカやフランス、ベトナムなどの他国の影響を受け、政治的考えが関わっているので、簡単には説明できませんが、国内で大量虐殺が起こった「ポル・ポト政権時」のことだけ説明します。

１９７０年代、カンボジア内戦の結果、ポル・ポトが政権を握りました。そして、すぐに都市部にいた人達を強制的に農村部に追いやりました。農業に従事させるためです。ポル・ポト率いるクメール・ルージュという政党は、「原始共産主義（階級や格差の全くない原始時代の状態に戻そうとする考え）」を掲げました。「知識は人々の間に格差をもたらす」という考えから、「国を指導する我々以外の知識人は自国には不要」と考えにつながりました。すべての知識人を集めるために、農村部に追いやった人達や、留学や仕事で国外へ行っていた人たちに向けて「国の再興のために、医者や教師、学生だった人は名乗り出てほしい」と告げます。名乗り出た人たちは、政権によって殺されました。これが次第にエスカレートしていき、「本を読んでいるから」「海外に行ったことがあるから」というようなめちゃくちゃな理由で知識人たちが、殺されるようになりました。そのようにして、カンボジア国内から知識人（と思われた人）は次々と殺されていきました。大人と違い、何も知らない子供達は「悪質な思想に染まってない」「原始共産主義を良く理解する」という理由からポル・ポトは、積極的に社会的な役割（兵士、看守、医者など）に就かせました。その結果、子供が大人を監視し、殺すという悲惨で悲しい状況を生みました。後に、カンボジアから亡命した人々で結成された軍隊とベトナム軍の軍隊でポル・ポト政権を攻め、１９７９年に首都プノンペンを陥落させました。１９７５年から１９７９年の４年間の間に、虐殺の他、干ばつ、飢餓、疫病などで、２００万人～３００万人のカンボジア国民が亡くなったとされています。

このような歴史背景をもつカンボジアは、教育施設が非常に少なかったのです。ポル・ポト政権後、「国の再興のために必要なことは教育だ」という考え方のもと学校作りを進めていくのですが、中々進まない現実もありました。そこで、他国の援助を受けることになったのです。熊本では岸北町国際協会がそのような取組をしており、私たち国際課も取次窓口となってカンボジアの学校づくりに協力していくこととなったのです。特徴的なのは、カンボジアが教育の中心に据えたのが「音楽」ということです。情操教育を国の再興に繋げたのです。

話を元に戻しまして…。カンボジアからの研修員の名は「キン・ラーさん」です。キンさんは、カンボジアですでに教鞭をとる現役の先生です。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）